

職員の皆さんへ

平成28年新春の新たな決意を皆さんとともに誓い合ってから早くも一ヶ月が経過しました。

先週は歴史に残る思いがけない豪雪に見舞われ、身動きを奪われるとともにその後の水道管凍結や破損による断水を余儀なくされるなど市民生活に大きな影響を受けました。幸い人命を左右する重大な事案こそ発生しませんでした。生きていく上で不可欠なライフラインである生活用水の安定確保がいかに重要であるかを思い知らされると同時に、こうした自然の猛威も想定に組み込みながら安全安心の確保にさらなる努力をしなければならないことを強く認識した次第です。生活用水の供給にご尽力いただいた陸上自衛隊大村駐屯地ならびに有志市民の方々、また入浴サービスにご尽力いただいた有志ホテル・旅館関係者の皆様に改めて感謝を申し上げますとともに、被害を最小限に食いとどめた本市職員の努力に敬意を表します。

さて昨年度の平戸市ふるさと納税額が日本一になったことで多くのメディアがこれを取り上げ話題となりました。このことで市民レベルでも自信と誇りにつながり、産業現場においても設備投資や雇用拡大などの活況も見られています。

今年度の実績についても、年末までの総額は25億2900万円となり、専門サイトのふるさとチョイスの調べによれば、結果的に全国で3位となりましたが、金額は昨年比べて倍増しています。その原動力となっている生産現場の指標について、産業振興部が把握している昨年末までのデータを見ますと、創業セミナー受講者数が41名と前年度までの同類のセミナー参加者数を大きく上回り、また新規創業が7件、六次化新商品が7事業者により13商品が誕生するに至っています。また設備投資も9件で合計7,875万円にも伸びています。

こうした実績は、地方であっても地理的ハンディを克服し、やればできるということを実証したことになるのではないのでしょうか。

ここで興味深い文献を紹介します。経済評論家の上念司氏の『地方は消滅しない！』（宝島社）の中からの抜粋です。

私はここではっきりと断言したいと思います。

「アベノミクスの恩恵は、それを求め、普通に商売をしている人のもとには、必ず降り注ぎます」(中略)

アベノミクスの恩恵が受けられないのは、目の前のちょっとした余裕にあぐらをかいたり、「悲観論＝現実的」だと思い込んで後ろ向きなことばかりを言って、実際に恩恵が受けられるような具体的な行動を何もしていないからほかなりません。

(第五章 儲ける地方は生き残る P206～207)

ここでは私自身の「アベノミクス」の論評は避けたいと思いますが、この文章は、まさに経済活動の本質を言い当てており、悲観論を冷ややかに語ることが「賢いスタイル」だと信じ込み、評論ばかりで実践に移さないネガティブな経営者を批判していることも含めて、ある意味、正論ではないかと賛同できます。

いずれにしても、本市がこれまで取り組んできたふるさと納税制度を取り巻く産業振興部門は徐々に好循環を生み出し、波及効果としての活況が感じられるようになっていきます。さらにこうした活況感が本市のイメージアップにつながり、中身の伴った暮らしやすさの PR 戦略によって、実は今年度のUIターン者数は20世帯43人と大きく飛躍しています。この数字は県下でも顕著な実績となっており、これが生産者をはじめ関係者のモチベーションを高め、予想を超える意欲的連鎖を生じて平戸市としての地域ブランドが高く評価されつつあることの証左ではないでしょうか。

この流れをさらに確かなものとしながら、人口減少抑制に具体的な取組みを継続してまいりたいと思います。

先月末までの予算編成作業を経ながら、平戸市総合戦略はいよいよ具体化されつつあります。「ふるさと納税が日本一となった平戸市は、その使い道をどのように展開してくるか」という注目が寄せられ、先日も市長査定の際にテレビカメラが取材に入っていました。まさに地方の独自性を活かし、少子高齢社会をいかに生き抜いていくかが問われています。そしてそれらは、私たちが積み重ねていく広範にわたる数々の施策の内容と実践に関心が集まっているということです。

今後のスケジュールについても予算議会である3月定例市議会を目前に各課それぞれ慌しいことと思います。予算査定を経て上程する事業や新しく策定する条例などをさらに精査し、説明責任を果たせるよう綿密な準備をしてください。

さてここで、先月の長崎新聞のふるさと総合「記者の目」（平戸市局発）に掲載された心温まる記事について皆さんとともに振り返ってみたいと思います。

そこには『おもてなし 小さな気遣いから』と題する次の一文が目を惹きました。「フェリー乗り場まで行きよつとやろ。乗っていかんね」。平戸市の離島大島に取材に訪れた際、港まで歩いている途中で軽トラックに乗った男性から声を掛けられた。突然のことに戸惑ったが「同じ方向に行くけん」と、見ず知らずの私を乗せてくれた親切に「おもてなし」をあらためて考えさせられた。（中略）

大島村の取材を終え、港で船を待っている時、観光で訪れた夫婦の会話が耳に入ってきた。「道を歩いていたら、通りかかった人に車で送ってもらった」。偶然にも私と同じ体験で、地元住民の小さな気遣いに触れた夫婦にとって、忘れられない旅になったに違いない。」（原文のまま）

普段このコラムは辛口の記事が多い中にこの記者は、取材の行きと帰りに出会った何気ない市民の会話や色んなところで普通に行われているであろう親切な行いの積み重ねが、いつとはなしに観光客の満足度と好感度の向上に繋がっていること、さらに都会では見られない年代や職業を問わない人々の温かく豊かな民情に直接触れて、得も言われぬ心地よさを感じたのではないかと思います。

私もこの記事を通して、目立たないところで常に行われているこれら善意ある行動を改めて知ることが出来てとても嬉しくなったので、ここに掲載したいと思います。

いま全国的にインフルエンザが広がる懸念がニュースになっています。

私どもの使命の一つに市民の皆様の健康な生活を守ることも最優先の課題であり、そのためには先ずわれわれ自身が健康に注意してこうした疾病の予防や感染防止に心掛けなければなりません。お互いに心身ともに快適なコンディションを保ちながら、ベストを尽くして頑張ってください。

皆様のご奮闘に期待します。

平成 28 年 2 月 1 日

平戸市長 黒田 成彦